

律令国家の形成

律令国家は中国の制度を模倣して国家の枠組みをつくったが、一方で実際に機能させるために前の時代のあり方も受け継いだ。それはどのようなところに現れているだろうか。そして、律令国家は支配を浸透させ、天平文化が生まれるが、どのように中国と交流したのだろうか。また、なぜ日本的な政治のあり方が生まれてくるのだろうか。

1 律令国家への道

大化改新

充実した国家体制を整えた唐が7世紀半ばに高句麗への侵攻を始めると、国際的緊張の中で周辺諸国は中央

集権の確立と国内統一の必要にせまられた。倭では、大臣蘇我蝦夷の

子の入鹿が厩戸王(聖徳太子)の子の山背大兄王を滅ぼして権力集

中をはかったが、中大兄皇子は、蘇我倉山田石川麻呂や中臣鎌足

の協力を得て、天皇中心の官僚制による中央集権を目指し、645(大

化元)年に蘇我蝦夷・入鹿を滅ぼした(乙巳の変)。そして皇極天皇の

譲位を受けて、王族の孝徳天皇が即位して孝徳天皇となり、中大兄皇

子を皇太子、また阿倍内麻呂・蘇我倉山田石川麻呂を左・右大臣、

中臣鎌足を内臣、唐から帰国した高向玄理を国博士とする新政権が成立し、

大王宮を飛鳥から難波に移して政治改革を進めた。

646(大化2)年正月には、「改新の詔」

が出され、豪族の田荘・部曲を廃止して公地公民制への移行を目指す政策方針が示

された。全国的な人民・田地の調査、統

一的税制の施行が目指され、地方行政組織

の「評」が各地に設置されるとともに、中

央の官制も整備されて大規模な難波長柄豊

碕宮が営まれた。王権や中大兄皇子の権

力が急速に拡大する中で、中央集権化が進

Q ▶ 東アジアの国際的緊張と律令制の形成には、どのような関係があるだろうか。

②『日本書紀』が伝える詔の文にはのちの大宝令などによる潤色が多くみられ、戸籍や班田収授法のように、この時に施行されたことが疑問視される部分もある。一方、7世紀代の藤原宮木簡などにより大宝令施行以前には詔にみえる「郡」ではなく「評」が各地に設置されたことがわかる。また、地方豪族たちの申請により「評」(郡)を設けた経緯が、『常陸国風土記』にも記されている。

改新の詔

其の一に曰く、昔在の天皇等の立てたまへる子代の民、
処々々々屯倉、及び、別には臣・連・伴・造・国
造・村首の所有る部曲の民、処々の田荘を罷めよ。
仍りて食封を大夫より以上に賜ふこと、各差あらむ。
其の二に曰く、初めて京師を修め、畿内・国司・郡司・関
塞・斥候・防人・駅馬・伝馬を置き、及び鈴契
を造り、山河を定めよ。
其の三に曰く、初めて戸籍・計帳・班田収授の法を造れ。
其の四に曰く、旧の賦役を罷めて、田の調を行へ。……
別に戸別の調を取れ。
(『日本書紀』、原漢文)

① 二二二ページ参照。② 三三三ページ参照。③ おのおのの地位に
して給付する。④ 畿内国の司と読む説もある。⑤ 関所。⑥ 北辺の監
視要員。⑦ 公的な伝達・輸送に用いられる馬。⑧ 駅鈴と木契。とも
に駅馬・伝馬を利用する際の証明とした。⑨ 地方の境界を定める。
⑩ 一定基準で田地に賦課する税。

められた。こうした孝徳天皇時代の諸改革は、**大化改新**と呼ばれる。

天智天皇・天武天皇

唐と新羅が結んで660年に百済を滅ぼすと、百済の遺臣は日本に滞在していた百済王子の送還と援軍を要求した。孝徳天皇の没後、飛鳥で即位した**斉明天皇**（皇極天皇の重祚）は、百済復興を支援するため大軍を派遣したが、663年に**白村江**の戦いで唐・新羅連合軍に大敗した。668年には、唐と新羅は**高句麗**も滅ぼした。倭では白村江の敗戦を受けて防衛政策が進められ、664年には**対馬・壱岐・筑紫に防人と烽**がおかれた。また、百済からの亡命貴族の指導下に、九州の要地を守る**水城**や**大野城**・**基肆城**が築かれ、対馬から大和にかけて古代山城（朝鮮式山城）が築かれた。中大兄皇子は667年に都を**近江大津宮**に移し、翌年7年間の称制を経て即位して**天智天皇**となった。国内政策でも、664年には氏上を定め、豪族領有民を確認するなど諸豪族と融和をはかり、670年には最初の戸籍である**庚午年籍**を作成した。後世、はじめての法典である**近江令**が定められたといわれるが、編纂された法典ではなく、律令制へつながる個別の法令を指したらしい。

煙や火によって外敵の侵入を知らせるための施設

Q▶ 天武・持統天皇の頃に進められた政策は、どのようなものだったのだろうか。

①それまでの大王にかわって「天皇」という称号が用いられるのは、「大君は神にしませば」と柿本人麻呂がうったように、天皇の神格化が進んだこの頃のこととする説があるが、推古天皇の頃に隋との外交交渉の中でつくられたとの説もある。また、乱の際に勝利を祈願した伊勢の神が、国家的な祭祀の対象となった（伊勢神宮）。

天智天皇が亡くなると、翌672年に、天智天皇の子で近江大津宮の朝廷を率いる**大友皇子**と天智天皇の弟**大海人皇子**とのあいだで皇位継承をめぐる戦い（**壬申の乱**）がおきた。**大海人皇子**は東国の美濃に移り、東国豪族たちの軍事動員に成功して**大友皇子**を倒し、翌年**飛鳥浄御原宮**で即位した（**天武天皇**）。乱の結果、近江朝廷側についた有力中央豪族が没落し、強大な権力を手にした天武天皇を中心に中央集権国家の形成が進んだ①。

天武天皇は、675年に豪族に与えた部曲を廃止し、官人の位階や昇進の制度を定めて官僚制の形成を進めた。684年には**八色の姓**を定めて豪族たちを天皇を中心とした新しい身分秩序に編成した。地方では国がつくられ、**里**（50戸）が編成されるなど、国家体制の充実をはかり、さらに律令・国史の編纂、都城の建設、貨幣の鑄造（**富本銭**）にも着手した。

律令の成立と「日本」

天武天皇のあとを継いだ皇后の**持統天皇**は、689年に**飛鳥浄御原令**を施行した。これに

もとづいて翌年つくられた庚寅年籍は、人民を統一的に支配する基礎となり、以後6年ごとに戸籍をつくる制度が確立した。また、694年に中国の都城を模した藤原京に遷都した。天皇の住居や官衙、儀式をおこなう空間からなる宮と条坊制をもつ京の部分からなり、官僚制の成立と都城は不可分であった。

飛鳥浄御原令を基礎に、701(大宝元)年に刑部親王文武天皇が藤原不比等らによって大宝律令がつくられ、律令国家の仕組みが整った。さらに藤原不比等が養老律令をつくり、藤原仲麻呂によって757(天平宝字元)年に施行された。

大宝律令は、唐の永徽律令を手本にしたもので、今日の刑法に当たる律は唐律をほぼ写したものであるが、行政法や民衆の統治を定めた令は、日本の実情に合うように大幅に改変されている。中央の氏や地方の国造制の影響がみられ、氏族制的な要素も色濃く残っている。

「日本」という国号が正式に定められたのもこの頃のことで、702(大宝2)年に約30年ぶりに派遣された遣唐使が、唐に対して「日本」国の使者であると答え、倭の国名を改めている。

官僚制

中央行政組織には、神々の祭祀をつかさどる神祇官と行政全般を管轄する太政官の二官があり、太政官のもとで八省が政務を分担した。行政の運営は、有力氏族から任命された太政大臣・左大臣・右大臣・大納言などの太政官の公卿による合議によって進められ、8世紀初めには中央の有力氏族が1人ずつ公卿を出した。

地方組織としては、全国が畿内(大和・河内・摂津・山背、のちに和泉)・七道に行政区分され、国・郡・里(のち郷と改められる)がおかれて、国司・郡司・里長が任じられた。国司には中央から貴族が派遣され、一方、郡司にはかつての国造など伝統的な地方豪族が任じられた。そのほか、京には左・右京職、難波には摂津職、外交・軍事上の要地である九州北部には西海道を統轄する大宰府がおかれた。これらの諸官庁には、多数の官人が勤務したが、官人には漢字の文筆

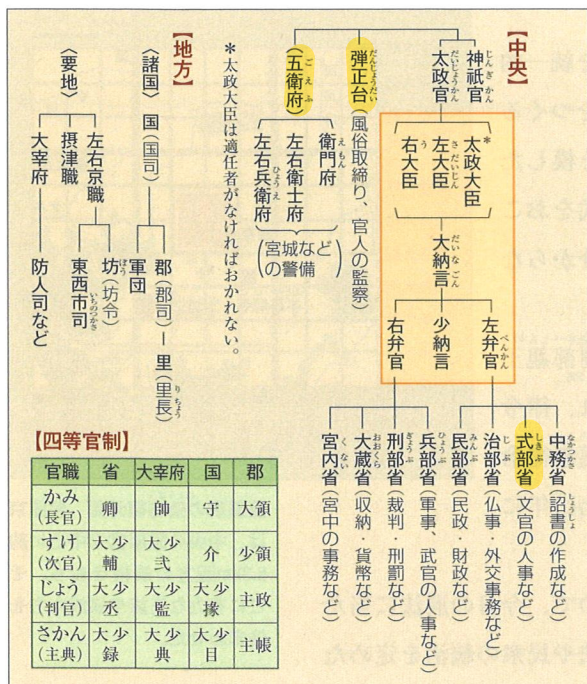


藤原京の条坊復元図 藤原京は、中央の藤原宮を中心に約5.3km四方の規模をもち、そこに有力な王族や豪族たちを住ませた。

Q▶ 律令制度の導入を急速に進めることができたのは、なぜだろうか。

Q▶ 「日本」という国号は、なぜ定められたのだろうか。

Q▶ 日本の律令制下の官僚制には、どのような特徴があったのだろうか。



律令官制表

①官人の給与には、その戸からの税収が封主に与えられる位封・職封などの封戸、位田・職田などの田地、年2回与えられる現物給与の季禄などがあつた。

Q ▶ 班田収授法が目指した土地・人民の支配は、どのようなものだろうか。

②戸は実際の家族そのままではなく、編成されたもので、平均的な戸の成員は25人程度であつた。8世紀前半の一時期には、この郷戸のもとに10人程度の小家族からなる房戸が設けられた。

③田地は条里制(→p.48図)で区画され、支給された。男性は2段(1段=360歩=約11.9a)、女性はその3分の2、私有の奴婢は良民男女のそれぞれ3分の1が班給された。土地の広狭に応じて、実際の班給面積には差があつた。

能力と儒教の教養とが求められた。

官人は位階を与えられて位階に対応する官職に任じられ(官位相当制)、位階・官職に応じて封戸・田地・禄などの給与^①が与えられたほか、調・庸・雑徭などの負担は免除された。とくに五位以上の貴族は手厚く優遇され、五位以上の子(三位以上は孫)は父(祖父)の位階に応じた位階を与えられて出仕できる**蔭位の制**により貴族層の維持がはかられ、五位以上の位階は一種の身分としての意味をもつた。

司法制度では、刑罰に答・杖・徒・流・死の**五刑**があり、地方では郡司が答罪

までの裁判権をもつた。位階をもつ官人は

位階の剥奪などにより実刑の免除が認められたが、国家・天皇・尊属に対する罪は**八虐**としてとくに重罪とされ、減免されなかつた。

民衆の負担

律令国家では、民衆は戸主を代表者とする戸^②に所属するかたちで**戸籍・計帳**に登録され、50戸で1里が構成されるように里が編成された。この戸を単位として**口分田**が班給され^③、租税が課せられた。戸籍は6年ごとに作成され、それにもとづいて6歳以上の男女に一定額の耕作できる田地(熟田)を実際に支給する**班田収授法**は、人民の生活を保障する側面が大きかつた。**口分田**は売買できず、死者の口分田は6年ごとの班年に収公された。

区分	正丁 (21～60歳の男性)	次丁(老丁) (61～65歳の男性)	中男(少丁) (17～20歳の男性)	備考
租	田1段につき稲2束2把(収穫の約3%に当たる。田地にかかる租税)			
調	絹・綿・糸・布や海産物など郷土の産物の一種を一定量	正丁の2分の1	正丁の4分の1	ほかに正丁は染料などの調の副物を納入
庸	都の労役(歳役)10日にかえ、布2丈6尺(約8m)	正丁の2分の1	なし	京・畿内はなし
雑徭	地方での労役、60日以下	正丁の2分の1	正丁の4分の1	のちに半減される

公民の税負担(「養老令」より)

民衆には**租**・調・庸・雑徭などの負担が課せられた。**租**は口分田などの収穫から3%程度の稲をおさめるもので、おもに諸国の各郡におかれた正倉^{しょうそう}に貯蔵された。このほか、国家が春と夏に稲を貸し付け、秋の収穫時に5割の高い利息とともに徴収する**出挙**(**公出挙**)^{すいこ}④もあった。⑤ 調は絹・布や地域の特産品を、庸は歳役^{さいえき}にかえて布などをおさめるもので、正丁^{せいてい}(成人男性)中心に課される人頭税^{じんとうぜい}で、郡司のもとでまとめられ、それらを都まで運ぶ**運脚**^{うんきゃく}の義務もあった。**雑徭**は、国司の命令によって水利工事^{こくふ}や国府^{こくふ}の雑用に年間60日を限度に奉仕^{ほうし}する勞役^{ろうえき}であった。
→p.44

④ 兵役は、正丁3~4人に1人の割で兵士が徴発され、兵士は諸国の**軍団**^{ぐんだん}で訓練を受けた。一部は宮城^{きゅうじょう}の警備に当たる**衛士**^{えいし}となったり、九州の沿岸を守る**防人**^{さきもり}⑥となったりした。兵士の武器や食料も自弁^{じべん}が原則であり、家族内の有力な労働力をとられることから、民衆には大きな負担であった。

⑤ 身分制度は、良民^{りょうみん}と**賤民**^{せんみん}にわけられ、**賤民**には官有の陵戸・官戸^{りょうこ}・公奴婢(官奴婢)と、私有の家人・私奴婢の五種類^{ごしき}(**五色の賤**)^{せん}があった。賤民の割合は人口の数%程度と低かったが、大寺院や豪族の中には、数百人をこえる奴婢を所有した者もいた。

④ 出挙は、もともと農民の生活維持のために豪族たちがおこなってきたものであったが、律令制下では国家の租税となり(公出挙)、その利息の稲は諸国の重要な財源となった。

⑤ 防人には東国の兵士が当てられ、3年間大宰府に属した。その編成方式には前の時代の国造軍のあり方が残っていた。

⑥ 中国の皇帝が周辺諸民族の君主に官職・称号などをさずけ国王に任ずることを冊封という。皇帝の臣下になることを意味した。

2 平城京の時代

②0 **遣唐使** 唐は、領域を拡大して周辺諸地域に大きな影響を与えた。西アジアとの交流も盛んになり、都の長安^{ちやうあん}(西安)は世界的な都市として国際的な文化が花開いた。東アジアの諸国も唐と交流し、漢字・儒教・仏教などを共有する東アジア文化圏が形づくられるようになった。

②5 8世紀に入ると、日本からの遣唐使はほぼ20年に1度の割合で派遣され、多い時は約500人もの人々が、4隻の船に乗って渡海した。日本は冊封^{さくほう}⑥は受けなかったが、実質的には唐に臣従^{しんじゆう}する朝貢^{ちやうこう}であり、大使以下の使者は正月朝賀に参列し、皇帝を祝賀した。唐からは高級

8世紀中頃の東アジアと日唐交通路 遣唐使の航路は、初め北路をとったが、**新羅**との関係が悪化した8世紀以降には南路をとった。



Q▶ 8世紀の遣唐使は、どのような役割を果たしたのだろうか。

①遣唐留学生だった阿倍仲麻呂は唐の玄宗皇帝に重用されて高官にのぼり、詩人王維・李白らとも交流したが、帰国の船の遭難で唐にとどまった。

②唐で安史の乱(755~763)がおこり混乱が広がると、渤海が唐・新羅に進出する動きに応じて藤原仲麻呂は新羅攻撃を計画したが、実現しなかった。

織物や銀器・楽器などを賜与されたほか、吉備真備や玄昶らの留学生や学問僧が、儒教や仏教、法律など多くの書物と知識を伝え、日本の律令国家としての発展に大きく寄与した。

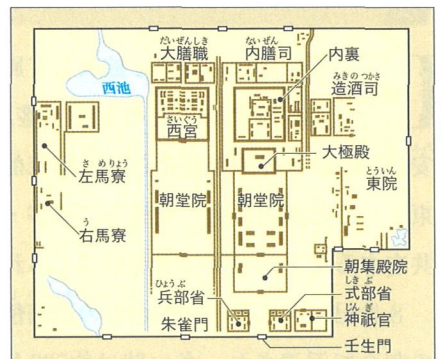
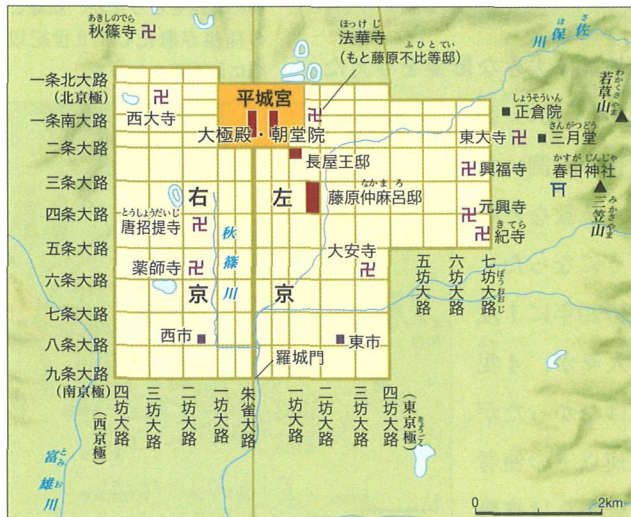
新羅は676年に唐の勢力を追い出して朝鮮半島を統一すると、唐をけん制するために日本とのあいだに多くの使節を往来させ、8世紀初めまでは日本に従うかたちをとった。やがて対等外交を主張したが、日本は新羅を従属国として扱おうとしたため、ときには緊張が生じた。8世紀末になると遣新羅使の派遣は少なくなるが、外交とは別に民間商人たちの往来はますます盛んになった。また、北方の中国東北部などに住む靺鞨族や旧高句麗人を中心に建国された渤海は、唐・新羅との対抗関係から727(神亀4)年に日本に使節を派遣して国交を求め、従属するかたちをとり、日本と友好的に通航した。

奈良の都平城京

710(和銅3)年、元明天皇は藤原京から奈良盆地北部の平城京へと遷都した。このち、山背国の長岡京・平安京に遷都するまでを奈良時代という。

平城京図 平城京は道幅74mの朱雀大路を中軸に左京・右京にわかれ、全体を囲む羅城の城壁はなかったとされる。長岡遷都後、大寺院周辺を除いて水田化し、遺跡が残っている。

平城京は唐の都長安にならい、碁盤の目状に東西・南北に走る道路で区画される条坊制をもつ都市であった。都は中央を南北に走る朱雀大路で東の左京と西の右京とにわけられ、北部中央には平城宮が設けられ、天皇の生活の場である内裏、政務や儀礼の場である大極殿・朝堂院、各官庁がおかれた。藤原宮よりも宮は広く、官衙も拡



平城宮図 奈良時代後半には、朱雀門を入った中央区の朝堂院の北に西宮があり、壬生門を入った東区には内裏の南に大極殿・朝堂院・朝集殿院が位置する。そのほか、二官八省の官庁群の配置が発掘調査によって知られている。



長屋王邸 長屋王邸は、左京三条二坊^{ほう}に4町(約250m四方)の敷地を占め、儀礼空間・生活空間や家政機関の空間などから構成されていた。(復元模型、奈良文化財研究所蔵)



富本銭(左)と和同開珎(右) 富本銭(銅銭)も、和同開珎(銀銭・銅銭)も、唐の銭貨にならったもので、近畿地方のほか各地から出土する。(左:径2.4cm、奈良文化財研究所蔵、右:径2.4cm、銅銭、日本銀行金融研究所貨幣博物館蔵)



大した。平城宮跡は、保存されて計画的に発掘調査がおこなわれ、宮殿・官庁・庭園などの遺構や木簡などの遺物が発見されて、古代の宮廷生活やそれを支えた財政構造などが明らかになっている。

京には貴族・官人・庶民が住み、はじめ大安寺・薬師寺・元興寺・興福寺、のちには東大寺・西大寺などの大寺院が立派な伽藍建築を誇った。人口は約10万人といわれる。五条以北の平城宮近くには長屋王邸など貴族たちの大邸宅が立ち並び、八条・九条などの宮から遠い地区には下級官人たちの小規模な住宅が分布していたことがわかっている。下級官人は、一方では畿内にあるみずからの本籍地で農業経営にも従事していた。

左京・右京には官営の市^{いち}が設けられ、市司^{いちのつかさ}がこれを監督した。市では、地方から貢納された産物、官人に禄として支給された布などが交換された。708(和銅元)年、武蔵国から銅が献上されると、政府は年号を和銅と改め、7世紀の天武天皇時代の富本銭に続けて、唐にならい和同開珎^{わどうかいちん}を铸造した^{ちゅうぞう}。銭貨は平城京造営で使役された人々に労働の代金として支給され、政府はさらにその流通を目指して711(和銅4)年に蓄銭叙位令^{ちくせんじょいれい}を発した。京・畿内では調を銭でおさめさせたが、一般には稲や布などを交換手段とする交易が広くおこなわれていた。

庶民の住宅 平城京南端に近い右京八条一坊では、1町の16分の1や32分の1という小規模な住宅跡がみつかり、下級官人や庶民の住宅の姿がわかった。宅地には2～3棟の建物・倉と井戸が配されていた。

(復元模型、奈良文化財研究所蔵)

Q▶ 平城京や地方の官衙遺跡から出土する木簡によって、どのようなことが明らかになったのだろうか。

③奈良時代初めの和同開珎のあと、国家による銅銭の铸造は、10世紀半ばの乾元大宝まで12回にわたり続けられて「本朝(皇朝)十二銭」(→p.63)と呼ばれたが、富本銭がみつかったことにより日本古代の銭貨は13種類となった。

地方の統治と蝦夷・隼人

中央と地方とを結ぶ交通制度としては、
都を囲む畿内を中心に東海道など七道

の諸国府へのびる官道(駅路)が整備され、約16kmごとに駅家を設ける駅制が敷かれ、官人が公用に利用した。地方では、駅路と離れて郡家などを結ぶ道(伝路)が交通体系の網の目を構成した①。

国には、中央から派遣された国司が政治をおこなう拠点として国府(国衙)が設けられ、国府の中心には政務や儀礼をおこなう国庁があった。国府の近くにはのちに国分寺も建立され、文化的な中心でもあった。一方、郡には郡家(郡衙)が設けられ、租を蓄える正倉がおかれ、近くに郡司の氏寺も営まれた。国司には中央の官人が一定の任期で派遣されたが、郡司にはもとの国造などの在地の豪族が任命され、任期はなく地位は世襲され、多くの田地の保有が認められていた。律令制の民衆支配は、郡司のもつ伝統的な支配力によって可能になっていた。郡家の遺跡からも木簡・墨書土器などの文字資料が出土し、律令制の文書主義にもとづき漢字文化が地方にも展開した様子が知られる。

政府は鉄製の農具や進んだ灌漑技術を用いて耕地の拡大にもつとめ、長門の銅、陸奥の金などの鉱物資源の採掘も国家主導でおこなわれた。また養蚕や高級織物の技術者を地方に派遣して、生産をうながした。

律令国家は、日本を中華とする唐と同じ帝国構造をもち、新羅や渤海を蕃国と位置づけたほか、国内では東北地方に住む人々を蝦夷、九州南部の人々を隼人と呼び、異民族(夷狄)として服従させ、支配地を拡大していった。7世紀半ばに、日本海側に淳足柵・磐舟柵が設け

① 東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道の駅路が推定される各地では、一定規格の道幅(12・9・6 m)で、側溝をもって平地部を直線的にのびる古代の官道の遺跡が発見されている。

Q▶ 地方の統治において、国司と郡司はどのような関係にあったのだろうか。

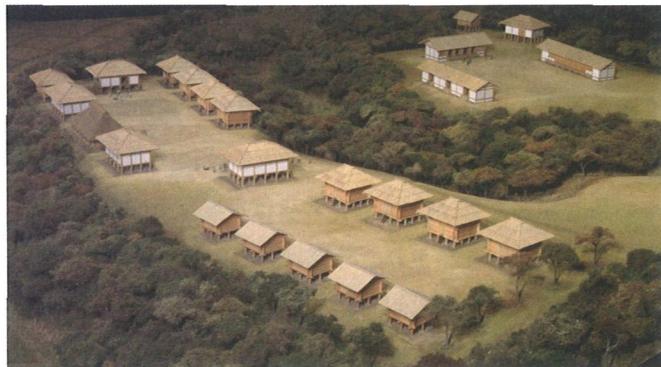
下野国庁 国府の中心となる国庁(政庁)は、公的な政務・儀式の場であった。下野国庁(栃木市)では、南門が開く方形の区画の中に、前殿をとまなう正殿と東西の脇殿とに囲まれて広場があった。

(復元模型、栃木県教育委員会蔵)



武蔵国都筑郡家 郡庁と思われる大規模な掘立柱建物群が「コ」の字状に並び、正倉の高床倉庫群などの施設が整然と配置されていた。

(神奈川県 長 者 原遺跡、復元模型、横浜市歴史博物館蔵)



5 し、政府の支配領域はまだ日本海沿いの拠点にとどまっていた。8世紀になると、蝦夷に対する軍事的な制圧



10 ついで秋田城が築かれ、太平洋側にも7世紀後期の城柵に続けて陸奥国府となる多賀城^{たがじょう}が築かれて、それぞれ出羽・陸奥の政治や蝦夷対策の拠点となった。

15 政府に朝貢^{ちょうこう}することが課された。種子島・屋久島^{たねがしま やくしま}も行政区画化され、さらに南の島々も赤木^{あかぎ}などの産物を貢進^{こうしん}する関係に入った。

藤原氏の進出と政界の動揺

たれていたが、やがて大伴氏や佐伯氏などの
旧来の有力諸氏の勢力をおさえて藤原氏が進
出してきた。藤原^{ふひと}不比^{ふひと}等は、律令の制定に大
きな役割を果たし、娘の宮子^{みやこ}を文武^{もんむ}天皇^{てんわう}に嫁
がせ、その子の皇太子(のち^{しやうむ}聖武^{せいむ}天皇^{てんわう})にも
娘の^{こうみやうし}光明子^{こうみやうし}を嫁がせて天皇家と密接な関係
を築いた。

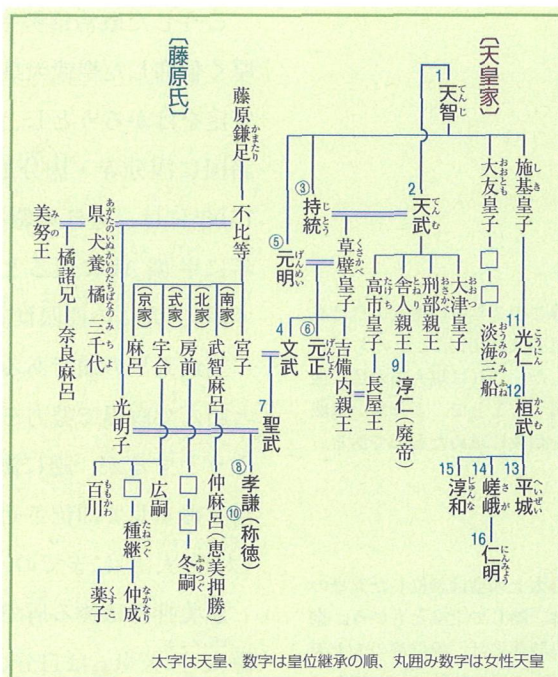
30 平(元)年、親王の待遇を受けていた左大臣長屋王とその妻吉備内親王を策謀によって自殺

多賀城跡 多賀城には、^{ついで} ^{さい}築地・材木堀に囲まれた外郭の中央に政務・儀式をおこなう政庁があり、ほかに実務を担う役所群・倉庫群や兵士の住居群などがあった。文書行政で使われた木簡や漆紙文書^{うるしなが}が出土している。

(復元模型〈政庁の建物配置は現在の見解と異なる〉、東北歴史博物館蔵、宮城県)

②蝦夷に対する政策は、帰順する蝦夷は優遇する一方、反抗する蝦夷は武力でおさえつけるという二面をもった。また城柵には関東を中心とする農民を柵戸として植民させた。

Q▶ 奈良時代、政治権力をめぐる争いはどのように展開したのだろうか。



天皇家と藤原氏の関係系図(1)(→p.57、63)

国分寺建立の詔

(天平十三年) ①三月……乙巳、
詔して曰く。「……宜しく天下諸
国をして各敬みて七重塔一区を
造り、并せて金光明最勝王經・
妙法蓮華經各一部を写さしむべし。
……僧寺には必ず廿僧有らしめ、
其の寺の名を金光明四天王護国
寺と為し、尼寺には一尼ありて、
其の寺の名を法華滅罪之寺と為し、
両寺相共に宜しく教戒を受くべ
し。……」と。(『続日本紀』、原漢文)
①七十四一年。②二月十四日の誤り。
③国分寺。④国分尼寺。⑤教え。

大仏造立の詔

(天平十五年) ①冬十月辛巳、詔
して曰く。「……粵に天平十五年歲
次癸未十月十五日を以て、菩薩
の大願を發して盧舍那仏の金銅
像一軀を造り奉る。……夫れ天下
の富を有つ者は朕なり。天下の勢を
有つ者も朕なり。此の富勢を以てこ
の尊像を造る。事や成り易き、心や
至り難き。……」と。

(『続日本紀』、原漢文)

①七十四三年。②仏教を興隆し、衆生を
救おうという願い。③華嚴經の本尊。
仏国土をあまねく照らす仏。

①皇后は律令では皇族である
ことが条件とされていた。天
皇亡きあと臨時に政務をみた
り、みずから天皇として即位
することもあり、また皇位継
承への発言権をもてる立場で
もあった。

させ(長屋王の変)、光明子を皇后①に立てることに成功した。しかし、
737(天平9)年に流行した天然痘によって4兄弟はいっさいで病死し、
かわって皇族出身の橘諸兄が政権を握ると、唐から帰国した吉備
真備や玄昉が聖武天皇に信任されて活躍した。

740(天平12)年には、藤原広嗣が吉備真備・玄昉らの排除を求めて
九州で大規模な反乱をおこしたが、鎮圧された(藤原広嗣の乱)。この
乱がおきてから数年のあいだ、聖武天皇は恭仁京・難波宮・紫香樂
宮などに都を転々と移した。

こうした政治情勢や飢饉・疫病などの社会的不安のもと、仏教を
厚く信仰した聖武天皇は、仏教のもつ鎮護国家の思想によって国家の
安定をはかろうとし、741(天平13)年に国分寺建立の詔を出して、
諸国に国分寺・国分尼寺をつくらせることにした。ついで743(天平
15)年には、近江の紫香樂宮で大仏造立の詔を出した。745(天平17)
年に平城京に戻ると、大仏造立は奈良で続けられ、752(天平勝宝
4)年、大仏の開眼供養の儀式が盛大におこなわれた②。

聖武天皇の娘である孝謙天皇の時代には、藤原仲麻呂が光明皇太后
と結んで政界で勢力をのばした。橘諸兄の子の奈良麻呂は仲麻呂を倒
そうとするが、逆に滅ばされた(橘奈良麻呂の変)。仲麻呂は淳仁天
皇を擁立して即位させると恵美押勝の名を賜り、権力を独占し、大師
(太政大臣)にまでのぼり、唐を模倣した儒教的政策を進めた。

恵美押勝は後ろ盾であった光明皇太后が死去すると孤立を深め、孝
謙太上天皇③は自分の看病に当たった僧道鏡を寵愛して淳仁天皇
と対立した。危機感をつのらせた押勝は764(天平宝字8)年に挙兵し

②この3年前に聖武天皇は在
位のまま出家したのち讓位
した。これは現人神が仏に従
属することで、より高い権威
を仏教に求めたものである。

③太上天皇は讓位した天皇の
称。略して上皇ともいう。奈
良時代には、讓位後の太上天
皇も天皇在位時と同じ権力や
権威をもった。

たが、太上天皇側に先制され滅ぼされた(恵美押勝の乱)。
淳仁天皇は廃されて淡路に流され、孝謙太上天皇が重祚
して称徳天皇となった。

道鏡は称徳天皇の支持を得て太政大臣・禪師、さらに法王
となつて権力を握り、西大寺の造営や百万塔の製作など、
仏教政治をおこなつた。769(神護景雲3)年には、称徳天
皇が宇佐神宮の神託によって道鏡に皇位をゆずろうとする
事件がおこつたが、この動きは和気清麻呂らの行動で挫折
した。称徳天皇が亡くなると、後ろ盾を失つた道鏡は退け
られた。つぎの皇位には、藤原北家の藤原永手や式家の
藤原百川がはかつて、長く続いた天武天皇系の皇統にかわ
つて天智天皇の孫である光仁天皇を立て、律令政治と
国家財政の再建を目指した。

民衆と土地政策

律令政治が展開した8世紀には、農業にも進歩
がみられ、鉄製の農具がいっそう普及した。生
活では、竪穴住居にかわつて平地式の掘立柱住居が西日本からしだ
いに普及した。家族のあり方は今日と違い、結婚はまず男性が女性の
家に通う妻問婚に始まり、夫婦としていずれかの父母のもとで生活し、
やがてみずからの家をもつた。夫婦は結婚しても別姓のままで、また
各々自分の財産をもつていた。生業の分担や子どもの養育などの面で、
女性の発言力が強かつたとみられる。

農民は、班給された口分田を耕作したほか、口分田以外の公の田
(乗田)や寺社・貴族の土地を原則として1年のあいだ借り、収穫の
5分の1を地子として政府や寺社・貴族におさめた(賃租)。天候不順
や虫害などに影響されて飢饉もおこりやすく、国司・郡司らによる
勸農政策があつても不安定な生活が続いた。困窮した農民の中には、
口分田を捨てて戸籍に登録された地を離れて他国に浮浪したり、都の
造営工事現場などから逃亡して、地方豪族などのもとに身を寄せたり
する者も増えた。

政府は、人口増加による口分田の不足をおぎない税の増収をはかる
ため、722(養老6)年には百万町歩の開墾計画を立て、723(養老7)

8世紀の政情(月は陰暦による)

720.	8	藤原不比等、死去
721.	1	長屋王、右大臣となる
724.	2	長屋王、左大臣となる
729.	2	長屋王の変
	8	光明子、皇后となる
734.	1	藤原武智麻呂、右大臣となる
737.		疫病流行、武智麻呂ら4兄弟死去
738.	1	橘諸兄、右大臣となる
740.	9	藤原広嗣の乱
	12	山背の恭仁京に遷都
745.	5	平城京へ戻る
757.	7	橘奈良麻呂の変
760.	1	藤原仲麻呂、大師となる
761.		道鏡、孝謙太上天皇の病氣治療
764.	9	恵美押勝(藤原仲麻呂)の乱
765.	閏10	道鏡、太政大臣・禪師となる
769.	9	宇佐八幡神託事件
770.	8	道鏡を下野に追放

④ 道鏡は下野薬師寺の別当として追放され、そこで死去した。

Q▶ 当時の民衆の家族のあり方や結婚は、どのようなかたちだったのだろうか。

⑤ 農民に食料・道具を支給し、10日間開墾に従事させて良田を開こうとしたが、成果は上げられなかった。

三世一身法

(養老七年四月) 辛亥、太政官奏^{そう}すらく、「頃者百姓漸く多くして田池窄狭^{さくさく}なり。望み請ふらくは、天下に勸め課せて、田疇を開闢^{ひらけ}かしめん。其の新たに溝池を造り、開墾を営む者有らば、多少を限らず、給ひて三世^{さんせい}に伝へしめん。若し旧き溝池を逐はば^お、其の一身に給せん」と。

(『続日本紀』、原漢文)

- 1 太政官が天皇に上申する書。
- 2 狭い。
- 3 本人・子・孫の三代。子・孫・曾孫の三代とする説もある。
- 4 既設の溝や池を利用して開墾した場合には。

墾田永年私財法

(天平十五年五月) 乙丑、詔^{みことり}して曰く、「聞くならく、墾田は養老七年の格^{きやく}に依りて、限満つる後、例に依りて収授す。是に由りて農夫怠倦^{たいけん}して、開ける地復た荒る、と。今より以後、任に^{まづ}私財と為し、三世一身を論ずること無く、咸悉く^{みなことごと}に永年取る莫れ。其の親王の一品及び一位は五百町、……初位已下庶人に至るまでは十町。但し郡司は、大領^{おほのりょう}、少領^{しょうりょう}に三十町、主政^{しゅしやう}、主帳^{しゅちやう}に十町。……と。

(『続日本紀』、原漢文)

- 1 三世一身法を指す。
- 2 意のままに。
- 3 4 5 6 いずれも郡司の職名。

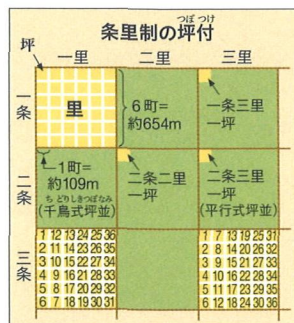
① 墾田の面積は位階に応じて定められ、一品の親王や一位の貴族の500町から初位以下庶民の10町まで差が設けられていた。また墾田は、租をおさめるべき輪租田であった。

② のち、765(天平神護元)年に寺院などを除いて開墾は一時禁止されたが、道鏡が退いたあとの772(宝龜3)年には、再び開墾と墾田の永年私有が認められた。

③ 初期荘園は、経営拠点の荘所を中心に、国司・郡司の律令制支配機構に依存して営まれたが、独自の荘民をもたなかったため、郡司の弱体化(→p.69)にともない衰退していった。

年には三世一身法^{さんせいいつしんぽう}を施行した。この法は、新たに灌漑施設を設けて未開地を開墾した場合は3世にわたり、旧来の灌漑施設を利用して開墾した場合は本人1代のあいだ田地の保有を認めるというもので、民間の開墾による耕地の拡大をはかるものであった。743(天平15)年には政府は墾田永年私財法^{こんでんえいねんしざいぽう}を發し、開墾した田地の私有を永年にわたって保障した^{しやうあく}①。この法は、政府の掌握する田地を墾田にまで拡大することにより土地支配の強化をはかる積極的な政策であったが、一方で貴族・寺院や地方豪族らの私有地拡大を進めることになった^{ごうぞく}②。とくに東大寺などの大寺院は、北陸などの広大な原野を独占し、国司や郡司の協力のもとに付近の一般農民や浮浪人らを使用して灌漑施設をつくり、大規模な原野の開墾をおこなった。これを初期荘園^{しやうきしやうえん}③という。

政府は天平年間(729~749)年には、律令ではとらえられなかった



条里制図 田地は国家の手で6町四方に区画され、一边を条、他辺を里と呼び、田地の所在は何条何里何坪で示された。1坪は、10段(1町)の耕地からなる。



東大寺領真置荘開田図 759(天平宝字3)年につくられた越前国足羽郡(福井市)の東大寺領真置荘の開田図。絵図の山々や条里制水田の様子は、現在もその地形が残る。(正倉院宝物)

浮浪人に対して、浮浪先で浮浪人帳をつくって把握^{はあく}することを目指した。また各郡の正倉に蓄えられる^{とうこく}稲穀が、^{しやうぜい}正税として国司により一元的に管理・運用されるようになる。この結果、郡司の権力の背景が奪われ、国司による支配が強まるなど、氏族制^{しぞく}的な社会の中に律令制が本格的に浸透していった。一方で8世紀の末には、それまで郡司の伝統的な支配力を背景に徴収されていた^{ちやう}調・^{よう}庸に品質の悪化や^{たいのう}滞納が多くなった。

Q 政府のおこなった土地政策は、どのような結果をもたらしたのだろうか。

3 律令国家の文化

白鳳文化

天武・持統天皇の時代を中心とする律令国家の形成期には、飛鳥文化にかわる新たな傾向の文化が生まれた。仏教文化を基調とした生氣ある若々しい文化で、7世紀には新羅を経由し、8世紀には遣唐使の往来によって直接伝えられた、唐初期の文化の影響を受けている。この7世紀後半から8世紀初頭にかけての文化を^{はくほう}白鳳文化という。

天武天皇によって^{だいかんたいし}大官大寺・^{やくしじ}薬師寺がつくりはじめられるなど、仏教興隆は国家的に推進され、地方豪族も競って寺院を建立したので、この時期に仏教文化は急速に発展した。彫刻では興福寺^{こうふくじ}仏頭などがおおらかな表情を伝え、絵画では^{ほうりゅうじこんどう}法隆寺金堂壁画(1949年焼損)にインドや西域の影響が、また^{たかまつづかこふん}高松塚古墳壁画に中国や朝鮮半島の影響が認

- ※1 東大寺建立以前の官寺の筆頭
- ※2 天武天皇が皇后の病氣平癒を祈って創建
- ※3 「凍れる音楽」とも形容される
- ※4 また、水煙には飛天に雲をはわせた金銅製の透彫りが施されている。

※3
薬師寺東塔 730(天平2)年頃の建立だが、白鳳様式を伝えているとされる。三重塔の各層に^{きんぎょ}裳階と呼ばれる小さな屋根がついている。※4
(高さ34.1m、奈良県)

薬師寺金堂薬師三尊像 薬師寺本尊の金銅像。やわらかくも写実的で威厳に富む表情をもつ。平城京の薬師寺金堂が造営された養老(717~724年)頃の制作とする説がある。

(高さ254.7cm〈中尊、薬師如来〉、317.3cm〈左脇侍、日光菩薩〉、315.3cm〈右脇侍、月光菩薩〉、奈良県)



薬師寺東院堂の代表的仏像は、東院堂聖観音像である。

論語木簡 「子曰く、学びて時に之を習う、また説ばしからずや」という、『論語』学而篇の冒頭部分を記した7世紀の木簡。地方における儒教思想の受容がうかがえる。

(徳島県観音寺遺跡出土、徳島県立埋蔵文化財総合センター蔵)



興福寺仏頭 もと山田寺にあった薬師如来像で、蘇我倉山田石川麻呂の霊をとむらうため685年につくられたが、火災にあい、頭部だけが残った。(高さ98.3cm、奈良県)

・白鳳期の歌人としては、雄大・荘厳な長歌を残し、後世まで歌世と言われた**柿本人麻呂**がいる。
・女流歌人としては**額田王**が名高い。

Q▶ 天平文化の国際性は、どのような背景によって生まれたのだろうか。

Q▶ 律令国家が正史をつぎつぎに編纂したのは、なぜだろうか。

められている。

貴族たちは中国の教養を受容して漢詩文をつくるようになり、一方で和歌もこの時期に形式を整えた。また、統一的な国家組織の形成に応じて、中央の官人だけでなく地方豪族にも漢字文化と儒教思想の受容が進んだ。

天平文化と大陸

中央集権的な国家体制が整った奈良時代には、全国の富が中央に集められ、平城京を中心として高度な貴族文化が開花した。この時代の文化を、聖武天皇の時代の年号をとって**天平文化**という。当時の貴族は、遣唐使などによってもたらされる唐の進んだ文化を重んじたため、天平文化は、外来文化の影響を強く受けた国際色豊かな文化となった。

国史編纂と『万葉集』

律令国家の確立にともなう国家意識の高まりを反映して、政府の立場から統治の由来や国家の形成・発展の経緯を示すために、中国にならって国史の編纂がおこなわれた。

天武天皇の時代に始められた国史編纂事業は、奈良時代に『古事記』『日本書紀』として完成した。712(和銅5)年にできた『古事記』は、宮廷に伝わる「帝紀」「旧辞」にもとづいて天武天皇が**稗田阿礼**によみな**天武天皇の皇子で天皇の死後に謀反の疑いで捕えられて自殺した大津皇子**は漢詩文に秀でていた。



高松塚古墳壁画 石棺式石室内壁の漆喰の上に彩色された壁画。男性群像・女性群像のほか四神・星宿が描かれている。唐や高句麗の影響が指摘されている。(西壁、国(文部科学省所管)、明日香村教育委員会、奈良県)

らわせた内容を、^{おのやす まろ}太安万侶(安麻呂)が筆録したもので、神話・伝承^{しやう たいこ}①や推古天皇に至るまでの歴史を、漢字の音・訓を用いた日本語文で記している。720(養老4)年にできた『日本書紀』は、^{とねりしんのう}舎人親王が中心となって編纂したもので、中国の歴史書の体裁をふまえた漢文の編年体で書かれている^{へんねんたい}②。「帝紀」「旧辞」や各種の記録をもとに、神代から持統天皇に至るまでの神話・伝承・歴史が天皇中心に記された^{じんたい}③。

歴史書とともに地誌の編纂もおこなわれ、郷土の産物、地名の由来、古老の伝承などを筆録させる713(和銅6)年の命令によって、国ごとに風土記^{ふうどき}④がつくられた。

また、貴族や官人には漢詩文の教養が必要とされ、751(天平勝宝3)年には、大友皇子・大津皇子・長屋王らによる7世紀後半以来の漢詩をまとめて、現存最古の漢詩集^{かいふうそう}『懷風藻』が編まれた。8世紀半ばからの漢詩文の文人としては、淡海三船や石上宅嗣^{いそのかみのやかつぐ}⑤らが知られている。日本古来の和歌も、天皇から民衆に至るまで、様々な階層の人々によってよまれた。^{まんようしゅう}『万葉集』は759(天平宝字3)年までの歌約4500首を収録した歌集で、宮廷の歌人や貴族の歌だけでなく、東国の民衆たちがよんだ東歌や防人歌などもある。心情を率直に表しており、心に強く訴える歌が多くみられる^ふ⑥。

教育機関としては、官人養成のために中央に大学、地方では国ごとに国学がおかれた。大学には貴族の子弟や朝廷に文筆で仕えてきた氏族の子弟、国学には郡司の子弟らが優先的に入学した。学生は大学

①神話・伝承は、神々の出現や国生みをはじめとして、天孫降臨、神武天皇の「東征」、日本武尊の地方制圧などの物語からなる。

②中国の歴史書は、おもに「本紀」や「列伝」などで構成される紀伝体であるが、このうち「本紀」には皇帝や王朝に関するできごとが年代順に記されており、『日本書紀』は「本紀」の体裁にならった。

③この『日本書紀』のあと、朝廷による歴史書編纂は平安時代を引き継がれ、『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』が編纂された。これら6つの漢文正史を「六国史」と総称する。

④常陸・出雲・播磨・豊後・肥前の5カ国の風土記が現在まで伝えられている。このうちほぼ完全に残っているのは、『出雲国風土記』である。

⑤石上宅嗣は自分の邸宅を寺にして、仏典以外の書物も所蔵する図書館のような施設をおき、そこを芸亭と名づけて、学問する人々に開放したという。

⑥歌人としては、第1期(天智天皇時代まで)の有間皇子・額田王、第2期(平城京遷都まで)の柿本人麻呂、第3期(天平年間(729~749年)の初め頃まで)の山上憶良・山部赤人・大伴旅人、第4期(淳仁天皇時代まで)の大伴家持・大伴坂上郎女らが名高い。編者は大伴家持ともいわれるが、未詳である。

『万葉集』——貧窮問答歌①

人竝に 吾も作る②を 綿も無き布肩衣③の 海松④の如⑤ わわけさがれる 櫓⑥の 肩に打ち懸け 伏慮⑦の 廬⑧の内に 直土⑨に 薬解き敷きて 母は 枕の方に 妻子どもは 足の方に 閉み居て 憂へ吟ひ⑩ 竈には 火氣ふき立て 飯には 蜘蛛の巣懸きて 炊く 事も忘れて 鶏鳥の⑪ 呻吟ひ⑫ 居るに いとのきて 短き物を 端⑬截ると 云へるが如く 楚⑭取る 五十戸良⑮が 声は 寝屋戸まで 来立ち呼ばひぬ

(原典は万葉仮名)

① 山上憶良が筑前守であった七三一(天平三年頃)、中国の漢詩にならった作という。貧者と窮者の問答のかたちをとり、ここは貧者の問いに窮者がこたえた部分。

② 耕作する。

③ 麻布でつくったそまつな袖なし。

④ 海藻の一種。

⑤ 破れたが下がる。

⑥ ばら。

⑦ 屋根が低くつぶれた家。

⑧ ゆがみ傾いた家。

⑨ 地面にじかに。

⑩ 嘆きうめく。

⑪ のどぶに

⑫ 枕詞。

⑬ 細い力のない声を出す。

⑭ ち。

⑮ 里長。

① 山上憶良が筑前守であった七三一(天平三年頃)、中国の漢詩にならった作という。貧者と窮者の問答のかたちをとり、ここは貧者の問いに窮者がこたえた部分。

② 耕作する。

③ 麻布でつくったそまつな袖なし。

④ 海藻の一種。

⑤ 破れたが下がる。

⑥ ばら。

⑦ 屋根が低くつぶれた家。

⑧ ゆがみ傾いた家。

⑨ 地面にじかに。

⑩ 嘆きうめく。

⑪ のどぶに

⑫ 枕詞。

⑬ 細い力のない声を出す。

⑭ ち。

⑮ 里長。

①大学の教科は、五経(易経・尚書・詩経・春秋・礼記)などの儒教の経典を学ぶ明経道、律令などの法律を学ぶ明法道、音・書・算などの諸道があり、のち9世紀には漢文・歴史を学ぶ紀伝道が生まれた。ほかに、陰陽・暦・天文・医などの諸学が各役所で教授された。

Q▶ 飛鳥文化、白鳳文化、天平文化と移りかわる中で、仏教はどのように発展していったのだろうか。

②鑑真は、正式な僧侶となるのに必要な受戒(戒律を授かること)の作法を伝え、のちに唐招提寺を開いた。聖武天皇・光明皇太后・孝謙天皇は、鑑真本人から受戒している。受戒の場である戒壇は初め東大寺におかれたが、761(天平宝字5)年に、九州の筑紫観世音寺と東國の下野薬師寺にも設けられた。

③のちに行基は大僧正に任ぜられ、大仏の造営に協力した。社会事業は善行を積むことにより福德を生むという仏教の思想にもとづいており、光明皇后が平城京に悲田院を設けて孤児・病人を収容し、施薬院を設けて医療に当たさせたことも仏教信仰と関係している。

を修了し、さらに試験に合格して、はじめて官人になることができた①。

国家仏教の展開

奈良時代には、国家の保護を受けて仏教がさらに発展した。とくに仏教によって国家の安定をはかるという鎮護国家の思想は、この時代の仏教の性格をよく示している。

奈良の大寺院では、インドや中国で生まれた様々な仏教理論の研究が進められ、三論・成実・法相・俱舍・華嚴・律の南都六宗と呼ばれる学系が形成された。法相宗の義淵は玄奘・行基ら多くの弟子を育て、華嚴宗の良弁は唐・新羅の僧から華嚴の教えを学び、東大寺の建立に活躍した。また、入唐して三論宗を伝えた道慈も、大安寺建立などの事業に活躍した。

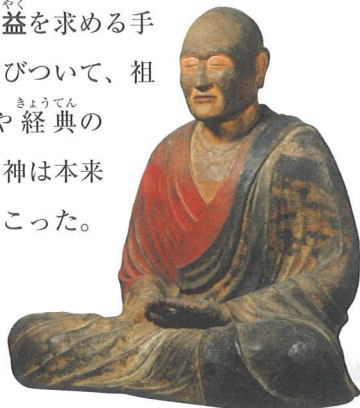
当時の僧侶は宗教者であるばかりでなく、最新の文化を身につけた一流の知識人でもあったから、玄奘のように聖武天皇に信任されて政界で活躍した僧もいた。日本への渡航にたびたび失敗しながら、ついに日本に戒律を伝えた唐の鑑真らの活動も、日本の仏教の発展に大きく寄与した②。

一方で、仏教は政府からきびしく統制を受け、一般に僧侶の活動も寺院内に限られていた。しかし行基のように、民衆への布教とともに用水施設や救済施設をつくる社会事業をおこない、国家から取締りを受けながらも多くの民衆に支持された僧もいた③。

鎮護国家の思想を受けて、聖武天皇による国分寺建立や大仏造立などの大事業が進められたが、仏教保護政策下における大寺院の壮大な伽藍や広大な寺領は、国家財政への大きな負担にもなった。仏教が日本の社会に根づく過程では、現世利益を求める手段とされたほか、在来の祖先信仰と結びついて、祖先の霊をとむらうための仏像の造立や経典の書写などもおこなわれた。また、仏と神は本来同一であるとする神仏習合思想がおこった。

鑑真像 鑑真は、たびたびの渡航の失敗にも屈せず、日本に渡来した。像は苦勞の末、盲目になった高僧の慈悲深い姿をよく表現している。

(乾漆像、高さ80.1cm、唐招提寺蔵、奈良県)



さらに仏教の政治化をきらい、大寺院を離れて山林にこもって修行する僧たちが出て、やがて新しい平安仏教の母体となっていた。

天平の美術

奈良時代には、宮廷や貴族の豊かな生活と仏教の発展に支えられ、多くのすぐれた美術作品が

つくられた。

建築では、寺院や宮殿に礎石・瓦を用いた壮大な建物が建てられた。もと平城宮の宮殿建築であった唐招提寺講堂のほか、東大寺法華堂・唐招提寺金堂・正倉院宝庫などが代表的で、いずれも均整がと

彫刻では、表情豊かで調和のとれた仏像が多く、以前からの金銅像や木像のほかに、木を芯として粘土を塗り固めた塑像や、原型の上に麻布を幾重にも漆で塗り固め、あとで原型を抜きとる乾漆像の技法が発達した。東大寺法華堂には、乾漆像の不空絹索観音像を中心に、塑像の日光・月光菩薩像、執金剛神像など、天平仏がまとまって伝わってきた。また興福寺では、乾漆像の八部衆像(阿修羅像を含む)などが知られる。



興福寺阿修羅像 光明皇后が造営した興福寺西金堂に安置された護法神の八部衆の1つ。乾漆像。細身の少年を思わせる清浄な像容と表情をもつ。(高さ153cm、奈良県)



東大寺法華堂不空絹索観音像 法華堂の本尊。乾漆像。絹索と呼ばれる縄によって多くの人々を救うという観音で、呪的な威厳に満ちた像容。玉・ガラスを散りばめた宝冠や光背などにも高い工芸技術がみられる。

(高さ362cm、207.2cm(右、日光菩薩像)、204.8cm(左、月光菩薩像)、奈良県。日光・月光菩薩像は、現在は東大寺ミュージアムに移されている)

東大寺法華堂執金剛神像

仏法の守護神の1つで、金剛杵という法具を手に執り、怒りの形相をみせる。天平当時の色彩が残る。(塑像、高さ173cm、奈良県)





正倉院宝庫 かつての東大寺の倉庫の1つ。右より北・中・南の3つの倉にわかれ、聖武太上天皇の遺品や正倉院文書などをおさめていた。三角材を井桁に積み上げた校倉造がみられ、高床式の構造をもつ。開扉には天皇の許可がいる「勅封」の倉であった。(奈良県)

螺鈿紫檀五絃琵琶 ラクダに乗った西域の胡人が描かれている。

(正倉院宝物、全長108.1cm、幅30.9cm、奈良県)



過去現在絵因果経 釈迦の伝記を記した因果経を下段に書き、上段にその内容に応じた絵を描いた巻物。原本は唐で制作されたという。(部分、東京藝術大学蔵)

薬師寺吉祥天像 吉祥天は福德をつかさどる女神で、麻布に描かれている。(縦53.3cm、奈良県)



絵画の作例は少ないが、正倉院に伝わる鳥毛立女屏風の樹下美人図や、薬師寺に伝わる吉祥天像などが代表的で、唐の影響を受けた豊満で華麗な表現が特徴である。釈迦の前世と半生を描いた過去現在絵因果経にみられる絵画は、のちの絵巻物の源流といわれる。

工芸品としては、正倉院宝物が有名である。聖武太上天皇の死後、光明皇太后が遺愛の品々を東大寺に寄進したものを中心に、服飾・調度品・楽器・武具など多様な品々が含まれる。螺鈿紫檀五絃琵琶・漆胡瓶・白瑠璃碗など、きわめてよく保存された優品が多く、唐ばかりでなく西アジア

①百万塔陀羅尼は、木版か銅版か説がわかれるが、年代の確かな現存最古の印刷物といわれている。

や南アジアとの交流を示すものがみられ、当時の宮廷生活の文化的水準の高さと国際性がうかがえる。また、称徳天皇が恵美押勝の乱後につくらせた木造小塔の百万塔と、その中におさめられた百万塔陀羅尼①も、この時代のすぐれた工芸技術を示している。

4 律令国家の変容

平安遷都と蝦夷との戦い

光仁天皇は、行財政の簡素化や民衆の負担軽減など、政治再建策の実施につ

とめた。やがて781(天応元)年に天皇は亡くなるが、渡来系氏族の血を引く高野新笠とのあいだに生まれていた息子の桓武天皇が、その直前に即位した。

光仁天皇の政策を受け継いだ桓武天皇は、仏教政治の弊害を改め、天皇権力を強化するために、784(延暦3)年に平城京から山背国の長岡京に遷都した。しかし、天皇の腹心で長岡京造営を主導していた藤原種継が暗殺され、その首謀者とされた皇太子の早良親王(桓武天皇の弟)が地位を追われる事件がおきた^②。そして794(延暦13)年には、平安京に再度都が移され、山背国も山城国と改められた。この平安京への遷都から、源頼朝が鎌倉に幕府を開くまでの約400年間は、平安時代という。

東北地方では奈良時代、律令国家がさらに北に向けて支配を拡大した。陸奥側では多賀城を基点に北上しながら城柵を設けていき、出羽側では秋田城を拠点に日本海沿いに勢力をのばしていった。城柵は、全体を取り囲む外郭の中に、政庁を中心として役所群や倉庫群

Q▶ 平城京から長岡京・平安京へと遷都された理由は何だろうか。

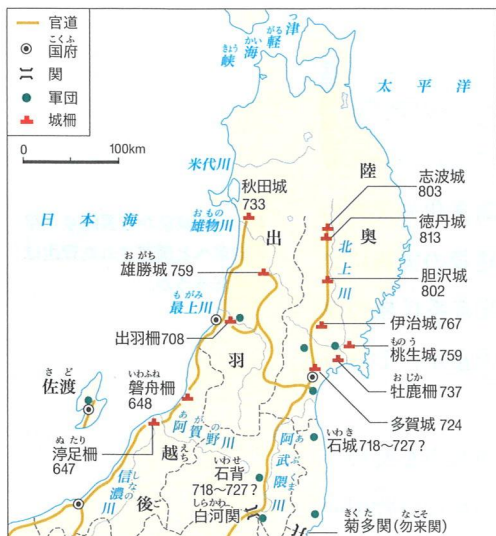
② 早良親王と関係の深かった大伴氏・佐伯氏など旧豪族の人々も処罰された。親王はみずから食を絶って亡くなるが、その後、桓武天皇の母や皇后があいついで死去するといった不幸があり、親王の怨霊によるものとされた。この怨霊の問題や、長岡京の完成の遅れが、平安京遷都の理由とされている。

読みといてみよう

平安京の構造にはどのような特色があるのだろうか。藤原京(→p.39)や平城京(→p.42)と比較して説明してみよう。

平安京図 東西約4.5 km、南北約5.2 kmで、構造は平城京に類似している。右京はのちにさびれ、左京と洛東がにぎわった。





東北地方の城柵 東北の城柵は北上川や日本海沿いを北上するように営まれていった。城柵を拠点に、政府の行政支配の浸透がはかられた。

Q▶ 7世紀から9世紀にかけて、律令国家の支配領域はどのように拡大していったのだろうか。

①一方、服属した蝦夷を、関東以西の各地に俘囚として移住させた。

②のち、嵯峨天皇の時に将軍文室綿麻呂が派遣され、最後の城柵徳丹城が築かれた。

③藤原緒嗣は、天下の民を苦しめているのは軍事と造作であると批判して、二大政策の継続を主張する菅野真道と論争した。桓武天皇は緒嗣の意見を採用し、蝦夷との戦争と平安京の造営をともに停止した。

Q▶ 地方では、政治と軍事に関して、どのような改革がおこなわれたのだろうか。

が配置された施設で、行政的な官庁としての性格が強く、そのまわりに関東地方の農民などを柵戸として移住させ、一帯の開発が進められた^①。こうして城柵を拠点に、蝦夷地域への支配の浸透がはかられたが、光仁天皇の780(宝亀11)年に、服属していた蝦夷の豪族伊治咎麻呂が反乱をおこし、一時は多賀城をおとしいれて焼き払うという、大規模な戦いへと発展した。この頃から、東北地方では30年以上にわたって戦争があいついだ。

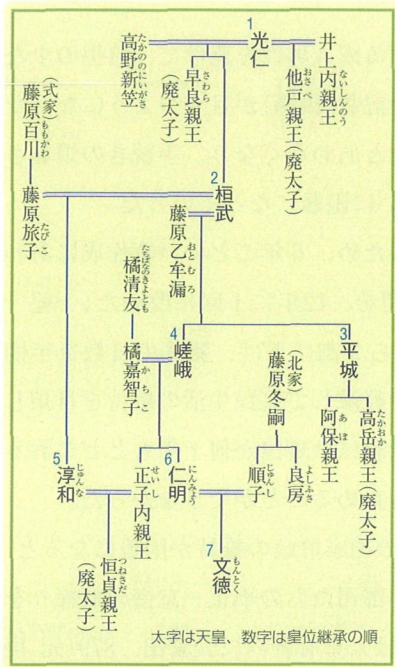
桓武天皇の789(延暦8)年には、紀古佐美を征東大使として大軍を進め、北上川中流の胆沢地方の蝦夷を制圧しようとしたが、蝦夷の族長阿弓流為の活躍により政府軍が大敗する事件もおこった。その後、征夷大將軍となった坂上田村麻呂は、802(延暦21)年、胆沢の地に胆沢城を築いて阿弓流為を服属させ、さらに翌年、北上川上流に志波城を築造し、東北経営の前進拠点とした。これにともない、多賀城におかれていた鎮守府は胆沢城に移された^②。一方、日本海側でも蝦夷の服属が進み、米代川流域まで律令国家の支配がおよぶようになった。

しかし、東北地方での戦いと平安京の造営という二大政策は、国家財政や民衆にとって大きな負担となったため、805(延暦24)年、桓武天皇は徳政相論と呼ばれる議論を裁定して、ついに2つの事業を打ち切ることにした^③。

平安時代初期の政治改革

桓武天皇は、長い在位期間のうちに天皇の権威を確立し、積極的に政治改革を進めた。

国家財政悪化の原因となった地方政治の緩みをなくそうとし、増えていた定員外の国司や郡司を廃止するとともに、新たに勘解由使^④を設けて、国司の交替の際の事務引継ぎをきびしく監督させた。軍事面では、唐の衰退などで東アジアの緊張が緩和したことを受けて、792(延暦11)年に東北や九州などの地域を除いて軍団と兵士を廃止し、かわりに郡司の子弟や有力農民の志願による少数精鋭の健児^⑤を採用する



天皇家と藤原氏の関係系図(2) (→p.45, 63)

いた藤原薬子は自殺、薬子の兄藤原仲成は射殺された(平城太上天皇の変、薬子の变ともいう)。この対立の際に、天皇の命令をすみやかに太政官組織に伝えるために、天皇の秘書官長としての蔵人頭が設けられ、藤原冬嗣らが任命された。その役所が蔵人所で、所属する蔵人たちは、やがて天皇の側近として宮廷で重要な役割を果たすようになった。また嵯峨天皇は、平安京内の警察に当たる檢非違使を設けたが、この檢非違使も、のちには裁判までおこなうようになるなど、京の統治を担う重要な職となっていく。

嵯峨天皇のもとでは、法制の整備も進められた。律令制定後、社会の変化に応じて出された法令を、律令の補足・修正法である格と施行細則である式に分類・編集し、弘仁格式がつくられた。これは、現実にあわせて官庁の実務の便をはかったもので、こののちさらに貞観格式・延喜格式が編纂された。これらをあわせて三代格式という。

地方と貴族社会の変容

8世紀後半から9世紀になると、農民間に貧富の差が拡大し、有力農民も貧窮に陥る。農民も浮浪・逃亡など様々な手段で負担を逃れようとした。そして戸

ことにした。

積極的な政治改革の方針は、平城天皇・嵯峨天皇にも引き継がれた。平城天皇は、官庁の統廃合を大胆に進め、財政負担の軽減をはかった。嵯峨天皇も即位すると改革に着手したが、810(弘仁元)年に、平城京に再遷都しようとする兄の平城太上天皇と対立し、「二所朝廷」と呼ばれる政治的混乱が生じた。

結局、嵯峨天皇側が迅速に兵を展開して、太上天皇出家に追い込み、その寵愛を受けて

④ 令に定められていない新しい官職を令外官という。勘解由使もその1つで、国司在任中の租税徴収や官有物の管理などに問題がない場合に、新任国司から前任国司に与えられる解由状という文書の審査に当たった。

⑤ 国の大小や軍事的必要に応じて、国ごとに20~200人までの人数を定め、60日交替で国府の警備や国内の治安維持に当たられた。

⑥ 格は三代の格を集めた類聚三代格が、式は『延喜式』が現在に伝わっている。そのほか、国司交替についての規定として、延暦・貞観・延喜の三代の交替式もつくられた。833(天長10)年には、令の解釈を公式に統一した『令義解』が清原夏野らによって編まれ、9世紀後半には、令に関する法律家たちの注釈を集めた『令集解』が惟宗直本によって編まれた。

Q▶ 民衆支配の実態は、どのように変化したのだろうか。

籍^{せき}には、兵役^{へいえき}・労役^{ろうえき}・租税^{そぜい}を負担する成人男性を避けて、負担の少ない女性などの登録を増やす、偽りの記載^{ぎせき}（**偽籍**）が目立つようになった。
→ p.70 写真
こうして政府による農民把握は実態とあわなくなり、手続きの煩雑さ^{はんざつ}もあって、班田収授^{はんてんしゅうじゅ}の実施はしだいに困難になっていった。

桓武天皇は班田収授を継続させるため、6年ごとの戸籍作成にあわせて6年に1回であった班田の期間を、12年に1回に改めた（一紀一班^{いっきいっばん}）。また、公出挙^{くしゅこ}の利率を5割から3割に下げ、雑徭^{ぞうよう}の日数を年間60日から30日に減らすなど、負担を軽減して農民生活の維持を目指した。しかし、効果はないまま、9世紀には班田が何十年もとどこおるようになり、農民間の格差の拡大も止めることができなかった。

調^{ちよう}・庸^{よう}などの未納によって中央の国家財政の維持が困難になると、政府は租税徴収にたずさわる国司^{こくし}・郡司^{ぐんじ}たちの不正^{たいまん}・怠慢^{たいまん}の取締りを強化した。また、823（弘仁14）年には大宰府管内に**公営田**、879（元慶3）年には畿内に**官田**（元慶官田）を設け、有力農民を使った直営方式で収益をはかるなど、財源の確保につとめた。しかし、官田は諸司田^{しよしでん}に分割されて各官庁の独自の財源となり、官人^{かんじん}たちもみずからの墾田^{こんでん}を増やして国家財政に対する依存を弱めた。天皇にも公費で開墾された**勅旨田**^{ちよくしでん}、皇族にも天皇から与えられた賜田^{しでん}があり、それぞれ独自の財源とされた。また、天皇と近い関係にあり、院宮王臣家^{いんぐうおうしんけ}と呼ばれた少数の皇族や貴族は、私的に多くの土地を集積し、国家財政を圧迫しつつ勢力をふるうようになった①。

① 下級官人たちは進んで院宮王臣家の従者（家人）になろうとし、国司に対抗する地方の有力農民たちも、保護を求めてやはり院宮王臣家の勢力下に入っていた。

Q▶ 教養として漢詩文が重視されたのは、なぜだろうか。

② 814（弘仁5）年に『**凌雲集**』、818（弘仁9）年に『**文華秀麗集**』、827（天長4）年に『**経国集**』と、3つの勅撰漢詩集があいついで編まれた。

唐風文化と平安仏教

平安遷都から9世紀末頃までの文化を、嵯峨・清和天皇の時の年号から**弘仁・貞観**文化と呼ぶ。この時代には、平安京において貴族を中心とした唐風文化が発展した。文芸を中心として国家の繁栄を目指す**文章経国**の思想が広まり、宮廷では漢文学が隆盛をきわめた②。仏教では新たに伝えられた天台宗・真言宗が広まり、密教が盛んになった。

嵯峨天皇はとくに唐風を重んじ、平安宮の殿舎に唐風の名称をつけたほか、唐風の儀礼・作法を受け入れて宮廷の儀式を整えた。また、文学・学問に長じた文人貴族を政治に登用し、国家の経営に参加させる方針をとった。

教養として漢詩文をつくることが重視されたため、漢文学が盛んになり、漢字文化に習熟した貴族たちは、漢文をみずからのものとして使いこなすようになった。このことは、のちの国風文化の前提となった。著名な文人としては、嵯峨天皇・空海・小野篁・菅原道真らが知られている。空海は、漢詩文作成についての評論『文鏡秘府論』や詩文集『性霊集』(『遍照發揮性霊集』)などにすぐれた文才を示し、菅原道真も詩文集『菅家文草』を著した。

大学での学問も重んじられ、とくに儒教を学ぶ明経道や、中国の歴史・文学を学ぶ紀伝道(文章道)が盛んになった。有力貴族は一族子弟の教育のために、寄宿舎に当たる大学別曹^③を設けた。一方、空海が創設した綜芸種智院は、庶民に対しても教育の門戸を開いたことで名高い。

奈良時代後半には、仏教が政治に深く介入して弊害もあったことから、長岡京・平安京への遷都では南都奈良の大寺院を新京に移転させず、桓武天皇や嵯峨天皇は最澄・空海らの新しい仏教を支持した。

近江出身の最澄は、近江国分寺や比叡山で修学したのち、804(延暦23)年の遣唐使に従って入唐し、天台の教えを受けて帰国したあと、天台宗を開いた。彼はそれまでの東大寺戒壇における受戒制度にあきたらず、新しく独自の大乘戒壇の創設を目指した。これは南都諸宗の激しい反発を招いたが、最澄は『顯戒論』を著して反論し、その死後、ようやく大乘戒壇の設立が公認された。これを受けて、最澄が開いていた比叡山の小堂は延暦寺の名を与えられ、平安京鎮護の寺院、さらには仏教教学の中心地として発展していった。浄土教の源信や鎌倉新仏教の開祖たちの多くは、ここで学んでいる。

讃岐出身の空海は、上京して大学などに学ぶが、儒教・道教に対する仏教の優位を論じた『三教指帰』を著して、仏教に身を投じた。804(延暦23)年に入唐して長安で密教を学び、2年後に帰国したあと、紀伊の高野山に金剛峯寺を建て、真言宗^④を開いた。また、空海が嵯峨天皇から与えられた平安京の教王護国寺(東寺)も、都にあって密教の根本道場となった。

密教は、最澄ののちに入唐した後継者の円仁・円珍によって、天台

③大学別曹はそれぞれの氏族が運営する大学の付属施設で、学生たちは学費の支給を受け、書籍を利用しながら大学で学んだ。和気氏の私文院、藤原氏の勸学院、在原氏や皇族の奨学院、橘氏の学館院などが知られる。



最澄 法相宗の徳一と、悟りへの道筋をめぐる論争した。(一乗寺蔵、兵庫県)



空海 長安の青龍寺で高僧の恵果に学び、密教の奥義を授けられた。(東寺蔵、京都府)

④真言は大日如来の真実の言葉の意で、その秘奥なことを指して密教と呼ばれた。釈迦の教えを経典から学び、修行して悟りを開こうとする顕教に対して、秘密の呪法の伝授・習得により悟りを開こうとする。

Q▶ 平安時代に入り、仏教はどのように展開していったのだろうか。

① 真言宗の密教を東密と呼び、天台宗の密教を台密と呼んでいる。円仁が838(承和5)年に渡唐し、密教を学んで847(承和14)年に帰国するまでの日々の記録が『入唐求法巡礼行記』である。10世紀末以降、延暦寺による円仁の門流は山門派、園城寺(三井寺)による円珍の門流は寺門派と呼ばれ、たがいに対立した。

Q▶ 天台宗と真言宗が貴族社会に受け入れられたのは、なぜだろうか。

室生寺金堂 もと正面5間、側面4間で、屋根は柿葺。柱の組み方など簡素な構造が特徴である。江戸時代に前面部分が追加された。山地を開いて寺院を建てた平安時代初期の特色がうかがえる、数少ない建築遺構である。(奈良県)



宗にも本格的に取り入れられた^①。天台・真言の両宗は、ともに国家・社会の安泰を祈ったが、とくに加持祈禱によって災いを避け、幸福を追求するという現世利益の面から、皇族や貴族たちの支持を集めた。

8世紀頃から、神社の境内に神宮寺を建てたり、寺院の境内に鎮守の神をまつて神前で読経したりする神仏習合の風潮がみられたが、平安時代に入ると、この傾向はさらに広まっていた。天台宗・真言宗は、奈良時代の仏教と違って山岳の地に伽藍を営み、山中を修行の場としたため、在来の山岳信仰とも結びついて修験道の源流となった。修験道は、山伏にみられるように、山岳修行により呪力を体得するという実践的な宗教であり、山岳信仰の対象であった奈良県吉野の大峰山や北陸の白山などの山々が、その舞台となった。

密教芸術

天台・真言両宗が盛んになると、神秘的な密教芸術が新たに発展した。建築では、それまでの形式にとらわれない伽藍配置で、山間の地に寺院の堂塔がつくられるようになった。室生寺の金堂などが、その代表例である。

彫刻では、密教と関わりのある如意輪観音や不動明王などの仏像が多くつくられた。これらの仏像は、1つの木材から姿を彫り出す木造で、量感あふれる表現のものが多く。また、神仏習合を反映して盛んになった神像彫刻としては、薬師寺の僧形八幡神像や神功皇后像などがある。

室生寺弥勒堂釈迦如来坐像
室生寺弥勒堂に伝わる、樫の一本造の等身坐像。ふくよかな半身と表情、鋭い衣文の表現(翻波式)をもつ。
(高さ106.3cm、奈良県)





教王護国寺両界曼荼羅(胎藏界) 大日如来を中心とした密教の世界観を図像化したもので、金剛界と胎藏界が一對として伝えられている。(縦183cm、横154cm、東寺蔵、京都府)

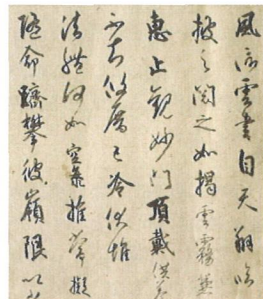
絵画では、園城寺の不動明王像(黄不動)のような、峻厳・靈妙な仏画が描かれたほか、神護寺や教王護国寺の両界曼荼羅など、密教の世界観を表した曼荼羅が発達した。密教の中心にある仏は大日如来で、その智徳を表す金剛界、慈悲を表す胎藏界という2つの仏教世界を、整然とした構成で図化したのが曼荼羅である。

書道では、唐風の書が広まり、嵯峨天皇・空海・橘逸勢らの能書家が出て、のちに三筆と称された。



観心寺如意輪観音像 観心寺の本尊。木彫に乾漆を併用する坐像。密教と結びついた如意輪観音像の代表作とされる。

(高さ109.4cm、大阪府)



風信帖 空海が最澄に送った書状。書き始めに「風信雲書、天より翔臨す」とあることから、この名称がある。

(部分、東寺蔵、京都府)

第3章のまとめ

- 問1 律令国家はいつ頃に形成され、いつ頃に変容したと考えられるだろうか。形成と変容の要因もあわせて考えてみよう。
- 問2 仏教が律令国家にとって重要な意義をもつようになったのは、いつ頃だと考えられるだろうか。
- 問3 8世紀の文化と9世紀の文化には、どのような違いがあるだろうか。また、その変化のきっかけは何だろうか。